

小学校国語教科書における児童文学の研究 —絵本の教材化を中心に—

富永 星

小学校国語教科書では教材として児童文学作品が使用されている。国語教科書に児童文学が採用されるようになったのは戦後である。戦争が終わって作成された国定教科書に、宮沢賢治の「どんぐりと山猫」や藤森成吉の「ピオの話」が掲載された。その後 1970 年代になると絵本が教材として採用された。1970 年代は絵本ブームと言われ、教育的価値を持つ絵本が生まれたことが教材化を促したと考えられる。さらに絵本の教材化には、子どもの興味・関心をひきだす窓口としての機能も期待された。国語教科書における児童文学の教材化については、以前より文学者や作家から、教科書に掲載された状態とオリジナルの状態とに相違があることが指摘されてきたが、この差異について小学校全学年の国語教科書を対象として体系的に行われた調査研究は見当たらなかった。そこで、本研究では、児童文学の読み方を教育する上で国語教育が果たしている役割を実証的に研究することを目的として関連する調査を行った。

調査については、教科書会社 5 社（光村図書、東京書籍、教育出版、学校図書、三省堂）で作られた小学校国語教科書の第 1 学年から第 6 学年のものを使用して、（1）小学校国語教科書に掲載されている児童文学作品の傾向の計量的調査、（2）絵本から国語教科書に掲載された作品の状態とオリジナルとの比較分析を行っている。前者では、教科書に掲載された児童文学作品のうち、教科書書き下ろしでなく以前に出版されたオリジナルがあるものだけを抽出し、それらのジャンル、作者、出版社に関する傾向を調査した。なお、作者や作品についての情報は Webcut Plus やオリジナル作品での記載を典拠とし、ジャンルの分類については、2011 年に国語教科書に掲載された作品を紹介した『ぷらたなす』（東京都立日比谷図書館発行）の分類法に基づいている。後者では、絵本から教科書に転載された作品を対象として、教科書における状態をオリジナルの絵本の状態と実際に比較することで両者の違いを明らかにした。具体的には、絵本の物理的な形態も視野に入れつつ、文章中の文字数や具体的な修正部分、絵の数、向き、大きさの違いなどを比較している。

本研究の調査からは、教科書に掲載された作品は 1920 年代と 1930 年代に生まれた日本人作者の作品が多く、少ない海外の作品についてはほぼ英語圏のものであるという傾向を指摘できる。ジャンルは創作ものが多く、絵本からの作品も多い。教材化にあたり絵に比べて文章を重要視する姿勢が強くうかがえる。絵本における“ことば”と“絵”の相互作用を研究したマリア・ニコラエヴァとキャロル・スコット（2011）の観点からは、絵本の意図が教科書では十分に伝わらないことが指摘され得る。また、ひらがなの漢字表記への変更、句読点の追加など教育的な配慮から修正も見られる。これらの計量的な調査を踏まえつつ、本研究では児童文学の読み方を教育する上で国語教育が果たしている役割を考察する。

（指導教員 原 淳之）